

66. 大津市延暦寺法華総持院跡 発掘調査抄報

はじめに

比叡山延暦寺では、伝教大師(最澄)の出家得度1200年慶讃の大法要を行うにあたり、法華総持院東塔の再建を計画した。この再建計画では、法華総持院の故地と推定される阿弥陀堂付近一帯を建立地とし、阿弥陀堂の南側約十数mへだてたところに東塔を建て、これら建物を中心にして回廊をめぐるせ諸堂を配置する大規模なものである。当該地は、昭和12年に阿弥陀堂を建立する際、岩盤まで削平しており遺構の検出は疑問視されていた。しかし、ドライブウェイに面した谷の斜面地では、堂塔より廃棄された遺物の堆積が予想されたため事前に発掘調査を実施することになった。調査の結果は本稿にのべるとおりで、特に建築遺構などの発見はなく、工事の実施に支障ないものと判断した。なお法華総持院東塔の建設は、調査終了後着工され、昭和55年秋に完成の予定である。

1. 法華総持院

比叡山延暦寺は、東塔、西塔、横川の三塔より構成されており、なかでも東塔は、延暦寺の主要な堂塔が集中し、一山の中心的位置を占めている。法華総持院は、東塔の名のおこりとなった最澄発願の近江東塔院をつぐ建物で、根本中堂と共に延暦寺における鎮護国家の信仰道場として中心的な役割をはたしてきた。法華総持院は現存しないが、その全容は『九院仏閣抄』の記録や、鎌倉時代に描かれた「比叡山東塔絵図」(細見良氏蔵)などによって盛時のありさまをうかがい知ることができる。『九院仏閣抄』によれば、法華総持院の建物配置は、中央に多宝塔があり、その東に灌頂堂、西に真言堂が配されている。そして回廊、塔正面の舞台、軒廊、阿闍梨坊と増坊が付属しており、各建物の屋根は檜皮葺であると書かれている。

記録によれば法華総持院は九回におよぶ火災をうけており、この点を今回の発掘調査である程度確認できるかどうか重要な課題であった。ちなみに創建より廃絶までの火災を順に拾いあげると、次のようになる。

- 仁寿3(853)年 法華総持院の造営を始める。
- 貞観4(862)年 法華総持院の造営を終わる。



第1図 遺跡位置図 1/25000

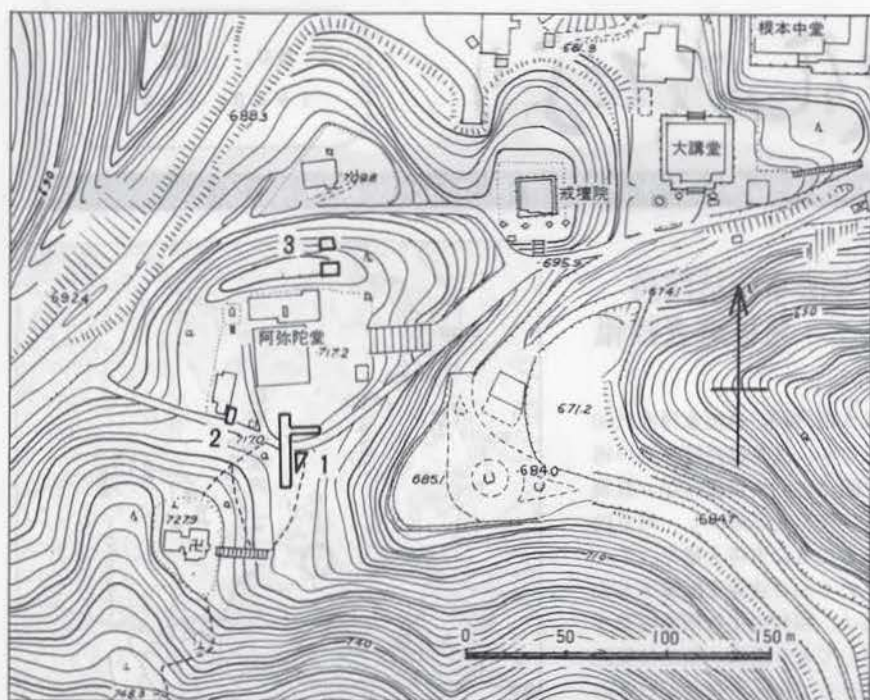
- | | |
|------------|--|
| 天慶4(941)年 | 焼く(1回目)。 |
| 天禄元(970)年 | 焼く(2回目)。 |
| 正暦5(994)年 | 焼く(3回目)。 |
| 延久2(1070)年 | 焼く(4回目)。 |
| 大治3(1128)年 | 焼く(5回目)。 |
| 元久2(1205)年 | 講堂以下諸堂焼けるとあるが、法華総持院が焼けたかについては疑問(6回目)。 |
| 建暦元(1211)年 | 焼く(7回目)。 |
| 元亨3(1323)年 | 焼く(8回目)。 |
| 永享7(1435)年 | 焼く(9回目)、ただし、創建時の場所と同じ位置かどうかについては問題がある。 |

2. 調査の結果

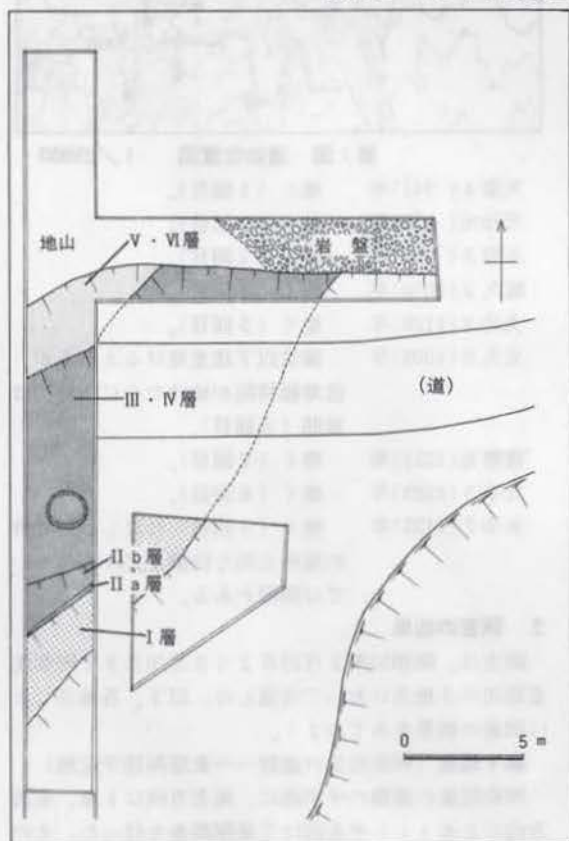
調査は、昭和53年1月23日より3月20日まで阿弥陀堂周辺に3地点において実施した。以下、各地点ごとに調査の結果をみてみよう。

第1地点(阿弥陀堂の南側……東塔再建予定地)

阿弥陀堂の南側の平坦地に、南北方向に1本、東西方向に2本トレンチを設けて発掘調査を行った。その結果、阿弥陀堂の南側を東西に横切る道路より北側は、



第2図 トレンチ配置図



第3図 第1地点土層平面図

地山の岩盤かその崩れた層で、また道路より南側の平坦地も大半が昭和12年の埋立てで、その間にはさまれるようにして、ごく小面積であるが遺物包含層の残存していることが確認された（包含層の平面的な広がりについては、第3図を参照されたい）。

昭和12年の埋立て以前の堆積は、地山の岩盤層までの間に、大きく6つの層が認められる。この6層のうち、I、II層とV、VI層は斜めに土が流れた状態で堆積しているが、III、IV層では水平な堆積を示している。また、III、

IV層中には、層の厚さの薄い間層が幾層も認められ、やはり水平に堆積していることから、この層は造成による人為的な堆積層ではないかと考えられる。同様な堆積を示す層は、東塔の大講堂や事務所の発掘調査でも確認されている。なお、III、IV層で遺構の検出が期待されたが、明確な遺構は認められなかった。ことにIII層の上面は、阿弥陀堂の建設以後に行われた諸施設の工事などにより、保存状態はきわめて悪かった。

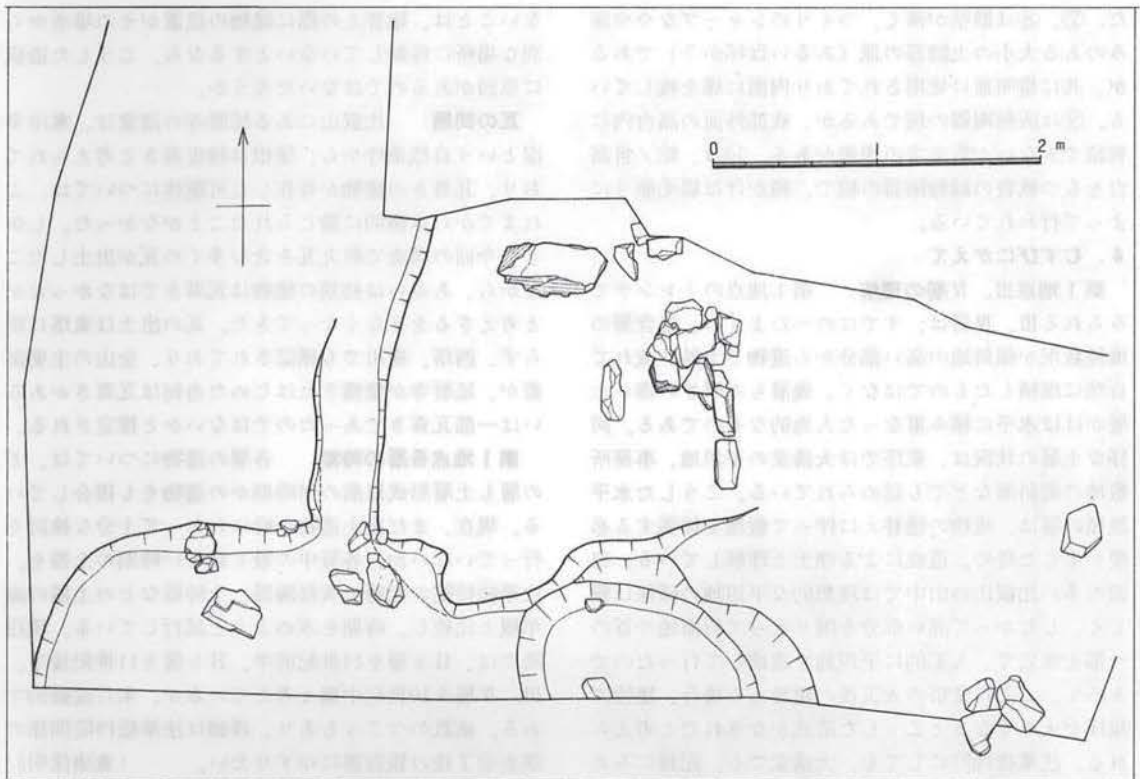
各層の状況については、下記のとおりである。

I層（黄色粘土）……昭和12年の埋立てまでの表土で、遺物は何も含まれていない。

II a層（黒褐色土）……炭化物を多く含んだ、層の厚さの薄い堆積層で、土色と炭化物によってII b層と明確に分けることができる。遺物の出土量は少なく、土師質土器のヘソ皿と通称されている小皿を主体に、瓦質土器の鍋や中世須恵器の片口鉢などが混る。

II b層（淡黒灰色土）……II a層に類似した土色、土質の層であるが、層の厚さも大きく遺物の出土量も多い。土師器の小皿を主体に、須恵器や緑釉陶器、白磁などが出土する。

III層（橙黄色粘質土）……同じような色調、土質の厚さの薄い層が幾層もあり、それらによってIII層を構成する。遺物の包含量は



第4図 第3地点南トレンチ遺構平面図

多く多彩である。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などの土器をはじめ、瓦、埴などが出土する。また特殊な遺物として、風字硯や窯壁様のものがある。

IV層（暗灰黄色粘質土）……III層に似た土色、土質で、あるいはIII層の一部をなすものかもしれない。遺物は下部に行くほど少なくなり、トレンチの床面でチャートの石鏝と石屑が出土した。

V層（茶褐色粘質土）……遺物は全く含まれていなかった。

VI層（暗黄灰色粘質土）……地山が崩れて斜面に流れて堆積したもの。

第2地点（東塔回廊予定地）

調査前のボーリング結果どおり、道路より北の阿弥陀堂の背後は、トレンチを入れると表土除去後すぐに地山があらわれた。ここでは、包含層や遺構は一切検出されなかった。

第3地点（阿弥陀堂北側の旧地表残存部分）

東塔再建予定地とは直接関係しないが、阿弥陀堂の北側に残る旧地表（昭和12年削平以前の面）の頂部（南トレンチ）と斜面中腹の犬走り状の部分（北トレンチ）の2ヵ所にトレンチを入れて遺構の有無を確認し

た。その結果、両トレンチとも土のかぶりは浅く、10～11世紀の遺物（土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、埴）を出土する包含層のあることが明らかになった。また、頂部のトレンチ（南トレンチ）では、わずかな面積ではあるが人工的なものと思われる石列の残骸が検出されたが、平坦地の南側の主要部分がすでに削平されていることから、どのような遺構を形成するのか全貌は不明である。なお本地点の両トレンチとも、遺構、包含層の複合は認められなかった。第3地点の調査結果から考えて、昭和12年の阿弥陀堂建設に伴う削平以前には、平坦地上に建物遺構（おそらく法華総持院）が残されていたことは明白であり、未調査のまま消滅したことは惜しまれる。

3. 出土遺物

第1地点のトレンチの各層より出土した遺物のうち主要なものを紹介しておこう(第5図)。

II a層を代表する遺物は、①、②のヘソ皿と通称される土師質の小皿で、他には小破片であるが瓦質の鍋③や、魚住古窯址のものと思われる口縁に特徴のある中世須恵器の片口鉢④があげられる。II b層の遺物は⑤の口縁部を屈曲させ端部を内側に丸く巻込んだ土師器の小皿や、高台の内側に段のついた近江産の硬質な緑釉陶器の小椀⑥に代表されよう。III層では遺物が多彩なため、完形品、あるいはそれに近いものを図示し

た。⑦、⑧は器壁が薄く、つくりのシャープなやや深みのある大小の土師器の皿（あるいは坏か？）であるが、共に燈明皿に使用されており内面に煤を残している。⑨は灰釉陶器の椀であるが、底部外面の高台内に判読できないが数文字の墨書がある。⑩は、蛇ノ目高台をもつ軟質の緑釉陶器の椀で、釉がけは刷毛塗りによって行われている。

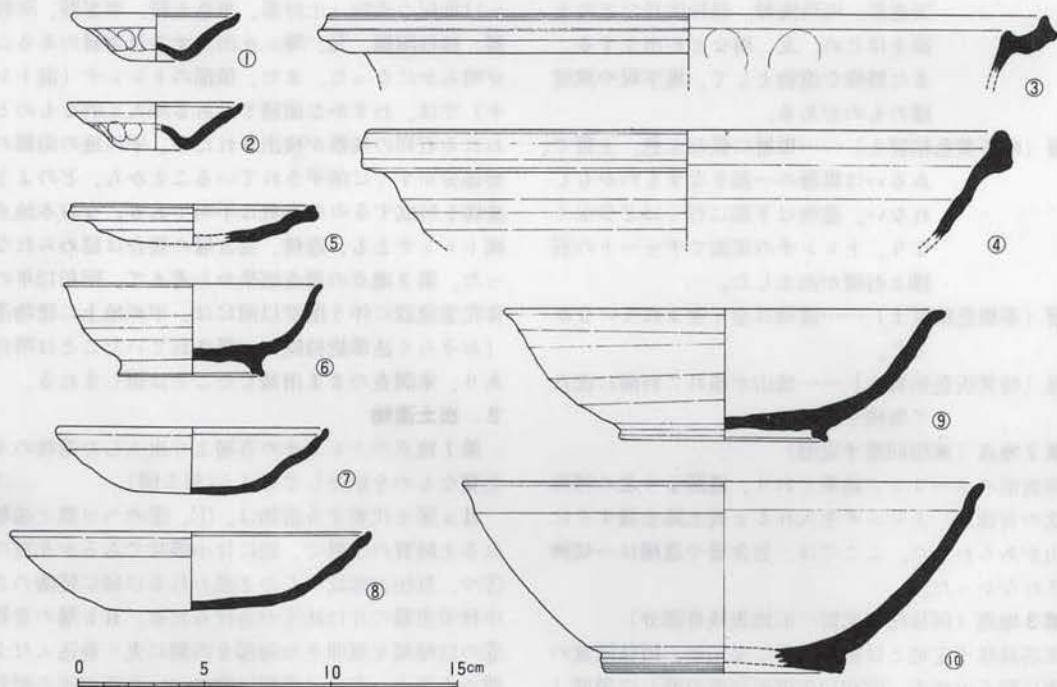
4. むすびにかえて

第1地点Ⅲ、Ⅳ層の理解 第1地点のトレンチでみられるⅢ、Ⅳ層は、すでにのべたように、包含層の堆積状況が傾斜地の高い部分から遺物と土砂が流れて自然に堆積したのではなく、幾層もの厚さの薄い土層がほぼ水平に積み重なった人為的なものである。同様な土層の状況は、東塔では大講堂の平坦地、事務所敷地の南斜面などでも認められている。こうした水平堆積の層は、建物の建替えに伴って敷地を拡張する必要が生じた時の、造成による埋土と理解している。斜面の多い比叡山の山中では理想的な平坦地の確保は難しく、したがって高い部分を削りとって斜面地や谷の一部を埋立て、人工的に平坦地を造成して行ったのであろう。ことに堂塔の火災後の建替えの場合、建物の規模が大きくなるとこうした造成がなされたと考えられる。法華総持院にしても、大講堂でも、記録にみえる建替え回数にくらべ、遺構の重複回数がきわめて少

ないことは、建替えの際に建物の位置がその場所から別な場所に移動していないとするなら、こうした造成に原因があるのではないだろうか。

瓦の問題 比叡山にある延暦寺の諸堂は、寒冷多湿という自然条件から、屋根は檜皮葺きと考えられており、瓦葺きの建物が存在した可能性については、これまでから本格的に論じられたことがなかった。しかし、今回の調査で軒丸瓦を含む多くの瓦が出土したことから、あるいは初期の建物は瓦葺きではなかったかと考えざるをえなくなってきた。瓦の出土は東塔に限らず、西塔、横川でも確認されており、全山の主要伽藍が、延暦寺が整備されはじめた当初は瓦葺きかあるいは一部瓦葺きであったのではないかと推定される。

第1地点各層の時期 各層の遺物については、どの層も土層形成以前の何時期かの遺物をも複合している。現在、まだ出土遺物全般にわたって十分な検討を行っていないが、各層中の最も新しい時期の土器を、法華総持院の記録や灰釉陶器、土師器などの土器の編年観と比較し、時期を求めようと試行している。現段階では、Ⅱ a 層を14世紀前半、Ⅱ b 層を11世紀後半、Ⅲ、Ⅳ層を10世紀中葉と考えているが、未だ流動的である。紙数のつごうもあり、詳細は法華総持院関係の調査完了後の報告書にゆずりたい。（兼康保明）



第5図 第3地点出土土器実測図